

改訂

プロジェクト学習で始める アクティブラーニング入門

— テーマ決定からプレゼンテーションまで —

稲葉竹俊【編著】

鈴木万希枝・村上康二郎

神子島健・佐藤宏樹

【共著】

コロナ社

改訂にあたって

プロジェクト学習にまだ不慣れな学生にとって、本書をよりわかりやすく、より親しみやすい水先案内人になりたいという執筆陣の願いが、本書の改訂という形で実を結ぶことになりました。実際に本書を活用したPBL授業を3年間、合計で6セメスター実施するなかで、学生にとって理解しやすい内容に書き改めたり、より丁寧な説明を付け加えたりしたほうが良い部分が、多々出てきました。また、執筆者達の担当するPBL授業の新しいテーマとしてSDGsを採用するというプロジェクトが浮上したことも改訂の副次的な動機となりました。

なお、本改訂では、つぎの5名で分担して執筆しました。

稲葉 竹俊：1, 3, 7章

佐藤 宏樹：2章

鈴木万希枝：4章

村上康二郎：5, 6章

神子島 健：8章

新指導要領に基づいて、アクティブラーニングを採用した授業が2020年から小学校で、2021年からは中学校で、いよいよ本格的に導入されます。そのようなきわめて重要な時期に、改訂版を出版できることは執筆者として大きな喜びとするところです。また、改訂をお認め頂いたコロナ社に謝意を表します。

2019年11月吉日

編者 稲葉 竹俊

まえがき

教員から学生への一方向的な講義だけでは、大学卒業後に学生たちが生涯にわたって活躍するのに十分な知識や能力の基礎を育てることができないという危機感から、学生が主体的かつ能動的に学習活動を進めていくようなアクティブラーニング型の授業が、多くの大学で導入されるようになっていきます。また、このムーブメントは大学だけにとどまらず、小学校から大学までの全教育課程に広がりを見せています。このような背景のもと、おびただしい数のアクティブラーニング関係の書籍がここ1、2年の間に出版されるようになりました。これらの書籍の大部分は、教員をはじめとする学校組織の関係者を対象に書かれたもので、学生向けの書籍はほとんどありません。アクティブラーニングという学習論、授業設計論自体が、大部分の教員にとって未知のものであり、まずはその実態を掌握し、またその実施方法や実施事例に触れることから、その導入の準備を始めなければならなかったわけですから、これも当然と言えば当然の事態とも言えるかもしれません。

しかし、いまや受験生向けの大学案内や大学のホームページ、さらには各大学が公開するカリキュラムポリシーなどでもこの「アクティブラーニング」という言葉が使われるようになっていきます。また、本書が中心的に扱っているプロジェクト学習（project-based learning）や問題解決学習（problem-based learning）、いわゆるPBLをアクティブラーニング型授業として、大なり小なり実施している大学も急増しています。本書はこのような状況を踏まえ、学習者として、つまりは主役としてアクティブラーニング型授業に参加している学生の皆さんがその授業のねらいや基本的な設計思想をよく理解しておく必要があるであろうという認識から執筆が計画されました。いままで慣れ親しんできた講義形式とは異なるスタイルの授業を行うのに教員サイドでそれなりの決意と前準備が必要であるのと同様、学生サイドにおいても、大学の既存の授業スタイルへの先入観を捨てて、新しいスタイルの授業に参加するのは大なり小なりのストレスになっていると思います。また、授業方法の変革が提唱されていることの社会的背景やその基本思想を理解せず、やみくもに参加を義務づけられる現状は放置できるものではありません。教育を社会的営為としてみると、学校組織はサービスの提供者であり、学生は享受者という面があります。サービスの享受者である学生の皆さんが、そのサービスの仔細について納得のいく説明を受けないままになっているのはあまり健全な状況とは言えません。

さらに、本書を手にとることで、学生の皆さんにはアクティブラーニング型の授業方法の

みならず、そこでめざされているものにも注目していただくと執筆者たちとしては大変嬉しく思います。本書の1章に説明されているように、アクティブラーニングによる学びは、大学4年間のみを視野に入れたものではなく、むしろ、卒業後、社会人として長期にわたって充実した仕事を続けている皆さんを念頭において、そのためにいまどんな力が必要なのかという視点から構想されたものであることをぜひとも理解してください。

アクティブラーニングは教育の根本に関わる原理であって、その具体的な実施方法はきわめて多岐にわたります。講義との併用や並列から、講義形式とは異なる学生主導のグループ活動を基本にするものまで、学生の主体的な活動が一部でも計画・実施されていれば、アクティブラーニング型授業になります。本書では、特にプロジェクト学習を扱っていますが、この選択にはさまざまな要因があります。まず、プロジェクト学習がアクティブラーニングの原理を全面的に採用した、典型的な授業形式であり、アクティブラーニングの原理を理解するうえでも、具体的な実現方法を理解するうえでも最適であると考えたからです。また、多くの大学において授業タイトルはさまざまですが、初年次ないし2年次の科目として、実質はプロジェクト学習やそれと共通点の多い問題解決学習が実施されている点、とくにそれらの授業ではレポート制作や口頭発表が最終課題と課されている点も、本書執筆においては重視しました。

本書の執筆者たちは、勤務校である東京工科大学において、数年間にわたってプロジェクト学習型の授業を設計・運営してきました。本書の内容はその体験に基づいて書かれたものです。1章（稲葉竹俊）においては、まずアクティブラーニングとはなにか、どのような背景から生まれてきたものかを概説しています。また、アクティブラーニングの実施方法としてプロジェクト学習の概要を示し、その全体的な流れについて説明しています。これに続く2章（奥正廣）ではプロジェクト学習などのグループ単位での協働を伴う学習活動における基本ルールや作業の進め方やアイデアの立案・練り上げのための技法が述べられています。

3~7章までが具体的なプロジェクト学習のプロセスを段階的かつ実践的に解説した部分であり、本書の中核部分となります。まず、3章（稲葉竹俊）では、プロジェクトでの取り組みテーマをどう絞り込むかについての方法や、プロジェクト学習に適したテーマ選択のための指針が提示されています。テーマが決まったら、どのように資料を収集し、分析を行うかについてが、資料収集の方法と併せて、4章（鈴木万希枝）で述べられています。5、6章（村上康二郎）では、レポートおよびプレゼンテーション用のスライド資料をいかに作成するかについての実践的な指針が具体的に説明されています。7章（稲葉竹俊）は最終プレゼンテーションに向けての準備と発表で気をつけるべきポイントについての実践的なアドバイスが述べられています。

最後の8章（稲葉竹俊、工藤昌宏）は、入門的なプロジェクト学習の事例として、執筆者

たちが運営している東京工科大学2年次学生を対象としたプロジェクト学習型授業の内容や授業の回ごとの活動について紹介しています。また、8章で紹介したプロジェクト学習授業で学生たちが適時提出しているさまざまなシートをwebサイトに掲載しています。

学生の皆さんが、アクティブラーニング、とりわけプロジェクト学習活動の過程で遭遇するに違いないさまざまな困難に出会ったとき、本書を良き相談相手にそれら問題の解決にチャレンジしてくれるなら、まさにわれわれ執筆者たちとしては著者冥利に尽きるというものです。

2016年12月吉日

編 者 稲葉 竹俊

本書の使い方

本書はアクティブラーニングの授業形態中でも、最も学生がアクティブに学習を進めることが求められるプロジェクト学習に焦点をあてながら、学生の皆さんがアクティブラーニングという新しい学習のあり方への理解と親密度を深めることを意図して書かれています。プロジェクト学習の最終成果物は、本書のようにレポートやプレゼンテーションである場合だけではなく、アプリケーションや作品、さらには学内や地域でのイベントとなる場合もあると思います。しかし、これらが最終成果物である場合でも、なんらかのドキュメントを提出し、最終成果物の背景や意義さらには内容の概要を口頭で説明するステップは必ず踏まなければならないと思います。その意味で、本書はプロジェクト学習の基本的な構成要素に話を限定して話を進めています。したがって、実際にこの本を活用する場合は、授業の進め方や読む人の目的などの具体的な状況に合わせて、膨らませたり、縮めたりして使って頂ければ良いものであって、以下はあくまで著者からのサジェスション（示唆）としてお読みください。

● 本書を授業で通して使う

本書は大学1年次、2年次の学生で、PBLとりわけプロジェクト学習型のアクティブラーニング授業に初めて参加する学生を対象に、アクティブラーニングという概念の理解から出発して、グループ単位の学習活動の技法を知ったあと、具体的なプロジェクト学習のプロセスを実地に体験し、最終プレゼンテーションを行うまでをステップ・バイ・ステップで進めていけるように構成されています。1～7章までを教科書として使うのであれば、半期（セメスター）、週1回の90分授業、14～15回分を想定して執筆されています。

webサイトで公開されている書き込みシートは、グループ単位の学習活動の過程のなかで、おたがいの意思を確認したり、教員に作業の進捗を報告したり、ほかのグループの発表を評価したりといったさまざまな局面に合わせて利用可能なシート類です。

● 本書の一部を使う

本書の一部を利用して使うこともあるかと思います。そのような利用のケースとしては以下のようなものがあるでしょう。その場合に一読を進めたい章があります。

- 1) 授業や演習でレポートを書かなければならないが、テーマ設定や調査、書き方等で指針がほしいケース⇒：3～5章の一読を勧めます。

- 2) 授業や演習でスライド資料を作って口頭発表を行わなければならないケース⇒6章と7章の一読を勧めます。
- 3) 演習や実験などのグループ学習でメンバー間での協働がうまく進まないケースや面白い議論やアイデアの提案ができないケース⇒2章の一読を勧めます。
- 4) 自分の将来のキャリアを形成するうえで、いまどんな能力を自身で培う必要があるか検討しているケース⇒1章の一読を勧めます。
- 5) 大学の講義や演習の進め方に、ときどき疑問を感じているケース⇒1章の一読を勧めます。

●先生方へ

PBL形式の授業は、大学教育へのアクティブラーニング導入の一翼を担う形で運用されることが多いのではないかと考えています。その際、アクティブラーニングという概念自体が流通するようになってからまだ日も浅いので、その実体や背景がなんであるかについてよく掌握できないままに、PBLを運営している場合も少なくはないのではないかと危惧するものです。あくまで学生向けを想定しつつも、アクティブラーニングの概要やアクティブラーニングとPBLとの関連性、プロジェクト学習と問題解決学習との相違点、プロジェクト学習の進め方など、教員サイドからもしばしば出てくる疑問点については、できるだけ簡潔に説明しているかと思います。また、8章では三つの Semester 授業の概要とスケジュールを掲載し、webサイトに補助資料（書き込みシート）を掲載しておりますので、ご活用いただくと光栄です。

さらに、この分野での知識を深めたいという諸先生におかれましては、アクティブラーニングシリーズ（溝上慎一監修：アクティブラーニングシリーズ，1～7，東信堂（2016））などの良書が昨今多数出ておりますので、それらをご参照されることを勧めます。

●書き込みシートの活用について

webサイトに授業で活用できるシート類のサンプルを掲載してあります。以下のURL[†]からダウンロードしてお使いください。

<https://www.coronasha.co.jp/np/isbn/9784339078237>

† 本書で紹介するURLはすべて2019年10月現在のものです。

目 次

1 章 アクティブラーニングと PBL

1.1	アクティブラーニングとは	1
1.1.1	アクティブラーニングの定義	2
1.1.2	アクティブラーニングがなぜ注目されるようになったか	5
1.2	アクティブラーニングの実施方法	11
1.2.1	アクティブラーニングの技法	11
1.2.2	二つの PBL の概要	11

2 章 協働を生み出すグループをつくるために

2.1	なぜ「グループ」で作業を行うのか	16
2.2	グループワークの流れ（プロジェクトの進め方）	17
2.2.1	PDCA サイクル	18
2.2.2	対話のプロセス	19
2.3	スムーズなグループワークを行うために	21
2.3.1	メンバー同士の相互理解	21
2.3.2	対話のルール	21
2.3.3	グループワークのルール	24
2.4	グループワーク活性化のツール	27

3 章 どのように問題を設定するか

3.1	問題設定にあたって	32
3.2	どんな問題がプロジェクト学習活動にふさわしいか	33
3.2.1	信頼性のある実証的データや関連資料	34
3.2.2	適度な難問を設定する	34
3.2.3	問題設定におけるチェック事項と文章化	38

4章 どのように調査・分析を行うか

4.1 調査・分析の流れ	42
4.1.1 下 調 べ	43
4.1.2 資 料 収 集	43
4.1.3 資料の整理と分析	44
4.1.4 資料の取捨選択	45
4.1.5 さらなる資料収集	45
4.2 資料の種類と評価	46
4.2.1 図 書	46
4.2.2 インターネット上の資料	47
4.2.3 資 料 の 評 価	48
4.3 資料収集の方法	49
4.3.1 図書館の利用	49
4.3.2 インターネットでの文献検索	53
4.4 資料収集に役立つ web サイト	56

5章 どのようにレポートを書くか

5.1 レポートとはなにか	59
5.2 レポートの構成・内容	60
5.2.1 タ イ ト ル	61
5.2.2 第1章 はじめに	61
5.2.3 第2章 概 要	62
5.2.4 第3章 問題点と議論状況	62
5.2.5 第4章 解決策の提案	63
5.2.6 第5章 おわりに	63
5.2.7 参 考 文 献	64
5.3 レポートを作成する際の注意事項	64
5.3.1 レポートをわかりやすくする工夫	64
5.3.2 文章表現に関する注意事項	64
5.3.3 レポートの準備について	66
5.4 参考文献の記載について	66
5.4.1 参考文献について	66
5.4.2 参考文献の記載方法	67

5.5 サンプルを用いた解説	69
----------------------	----

6章 どのようにスライド資料を作成するか

6.1 わかりやすいスライドを作成するための基本的な考え方	72
6.2 スライドの構成・流れ	73
6.2.1 スライドの構成	73
6.2.2 スライドの枚数・デザイン	73
6.3 文字・文の書き方	74
6.3.1 文字の書体と大きさ	74
6.3.2 文の書き方	75
6.4 図解の仕方	76
6.4.1 さまざまな図の形式	76
6.4.2 ボックスと矢印	77
6.5 表・グラフの作成方法	77
6.5.1 表の作成について	77
6.5.2 グラフの作成について	78
6.5.3 表・グラフに関する注意事項	79
6.6 画像・イラストの利用方法	80

7章 どのように口頭発表を行うか

7.1 プレゼンテーションの準備の流れ	81
7.1.1 読み原稿の作成	82
7.1.2 読み練習	82
7.1.3 発表練習	83
7.1.4 想定質問と回答練習	83
7.1.5 本発表	83
7.2 ほかのグループの発表を聴く	85

8章 プロジェクト学習事例

8.1 テーマ設定の方向性	86
8.1.1 テーマ領域	86

x 目 次

8.1.2	テーマ選択の例 ① 新聞を用いて社会問題を探すプロジェクト学習	87
8.1.3	テーマ選択の例 ② SDGs と関連付けたテーマのプロジェクト学習	88
8.1.4	テーマ選択の例 ③ 企業研究のプロジェクト学習	90
8.2	プロジェクト学習のスケジュール案	92
8.2.1	テーマ決定までの流れのイメージ	92
8.2.2	全体のスケジュール案	94
	引用・参考文献	96
	索 引	98

1 章 アクティブラーニングと PBL

これから皆さんは **PBL** と呼ばれる学習方法でグループ学習を始めていくわけですが、その具体的な学習の手順の詳細の説明の前に、この PBL という学習方法の概要を理解してもらいたいと思います。また、PBL の大もとにある「**アクティブラーニング** (active learning)」と呼ばれる教授・学習法への取組みが近年、日本の大学で広く採用されるようになっていきます。まず、このアクティブラーニングの概要やその背景などについて少し学んでいきましょう。そして、皆さんがこれから挑戦しようとしている学習の方法が大学教育のなかで持っている革新性や意義を理解することで、学習のモチベーションを高めてもらうと同時に、皆さん自身のステータスである「大学生」の学びが、大学教育のなかのみならず、社会全体のなかで、根本的な変化を求められているということを理解してください。

1.1 アクティブラーニングとは

いま、皆さんが籍を置いている大学で学習や教育の方法の見直しが急速に進んでいます。この見直しの指針となっているのがアクティブラーニングです。このアクティブラーニングは高等教育機関での導入に端を発し、いまは中学や高校での学びにも積極的に導入されるようになっていきます。皆さんもこの用語をどこかで読んだり、聞いたりしたことがあるかもしれませんね。各大学が毎年受験生向けに出している大学案内でも、アクティブラーニングという言葉が必ずと言っていいほど使われるようになっていきます。

アクティブラーニングという学習方法が最初に提唱されたのはアメリカを中心にした北米の大学でした。しかし、これが日本の大学の教育において取り組むべき重要課題として広く意識されるようになった直接の契機は、文部科学省の諮問機関である**中央教育審議会**による二つの高等教育に関する答申でした。つまり、2008 年に出された**学士課程教育の構築**に向けて（以下、学士課程答申）とそれを引き継ぐ形で 2012 年に出された**新たな未来を築くための大学教育の質的転換**に向けて（以下、質的転換答申）です。

まず、前者においては、これまでの知識重視の従来の大学教育では、変化が激しく予想困難で、つねに知識の更新と創造が必要なこれからの時代を生き抜く人材を育むことは難しい

2 1. アクティブラーニングとPBL

とされ、思考力やコミュニケーション力などの社会人になったときに必要な汎用的な能力（**社会人基礎力**）を大学が育てる場になることが求められました。

後者ではこのような力を養成するための具体的な手段や方法が提案されています。

例えば、「質的転換答申」ではつぎのように述べられています。少し長くなりますが引用してみます。

学士課程答申は「各専攻分野を通じて培う学士力」を「参考指針」として提示した。今重要なのは

- ・知識技能を活用して複雑な事柄を理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知能力
- ・人間として自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担い、倫理的、社会的な能力
- ・総合的かつ持続的な学習経験に基づく創造力と構想力
- ・想定外の困難に際して的確な判断をするための基盤となる教養、知識、経験を育むことである。これらは予想困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる学士力の重要な要素であり、その育成は先進国や成熟社会の共通の課題となっている。

さらに、答申はこれらの課題に応えるためには、既存の大学教育の体制では不十分であり、新しい教育方法の開発が緊急の課題であると指摘しています。そして、この教育方法の刷新の切り札の一つとして提案されたのが、北米で実践されていたアクティブラーニングです。

質的転換答申ではアクティブラーニングは**能動的学修**という言葉で翻訳され、従来の知識伝達・注入を中心とした**受動的学習**と対比されています。

翻って、普段のキャンパスでの皆さんの学習をすこし振り返って考えてみてほしいと思います。授業の多くは教員主導の講義形式ではないでしょうか。その講義に皆さんはどんなスタンスで参加していますか？ やはり、聴衆として参加しているのではないのでしょうか。熱心にノートをとったりする「聴衆」もいれば、居眠りしたりおしゃべりしたりする不熱心な「聴衆」もいるのでしょうかけれども、そんな熱意のあるなしとは関係なく、皆さんはおおむね受動的な学習者です。「でも…実験とか演習とかでは実際に手を動かしたり、仲間と共同で課題に取り組んでいるし…」と皆さん思っていますよね。たしかにそれらは、アクティブラーニングとしての側面を持っていると思います。そろそろアクティブラーニングとはなにかをもう少し明確にしておく必要がありますね。次項に進みましょう。

1.1.1 アクティブラーニングの定義

アクティブラーニングを定義するのはとても難しい作業です。これを扱った論文や書物は年々増える一方で、それに伴って定義の数も増えています。本書は研究書ではないので、定

義の迷路に踏み込む必要はありません。まずは、多くの学者が必ずと言っていいくらいに参照するアメリカの学者のボンウェルとアイソンの著した論文^{1),†}の定義があるのでこれを見ることにしましょう。この二人は、アクティブラーニングの主要な特徴として以下の点を挙げています。

- ① 学生は受動的に講義を聴く以上の活動に関わっている。
- ② 学生は活動（例：読む、議論する、書く）に関わっている。
- ③ 情報伝達よりも学生のスキルを伸ばすことが重要視される。
- ④ 態度と価値の探求が重要視される。
- ⑤ 学生の学習への動機が高まる。
- ⑥ 学生は即座に講師からフィードバックを受けることができる。
- ⑦ 学生は高次の思考（分析、総合、評価）に関わっている。

これらの特徴を持つアクティブラーニングを大学の教育活動のなかでもう少し具体的に考えてみますと、アクティブラーニングでは、従来の教員が学生に対して一方向的に行う講義形式の専門的知識の伝達ではなく、学生自身が読む・議論する・書くなどのなんらかの能動的に活動を行うことに主眼が置かれていることがわかります。また、その際には、単なる暗記や理解ではなく、**問題を発見**したり、**解決策を検討**したりといった**思考**（分析、総合、評価）が必要ですし、また、それらの活動の過程のなかでなんらかの**成果物**（アウトプット）を出すことが求められているようです。そして、そこで培われる学生の力は、単なる専門的な知識の積み上げではなく、**汎用的な能力（態度）、技能（スキル）、さらには、人間的成長（価値の探求）**であると考えられます。また、教員は知識を教え込むのではなく、学生たちの活動やアウトプットに応じる（フィードバック）役目を担います。

さらに、1.1節で触れた質的転換答申ではアクティブラーニングを以下のように定義しています。

教員による一方向的な講義形式とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等によっても取り入れられる。

ボンウェルとアイソンの定義と同様に、ここでも、教員が主役となる講義形式から学生が主役となる学習形式への転換がまず強調されています。続いて、やはり汎用的能力の育成が

† 肩付数字は巻末の引用・参考文献番号を表します。

4 1. アクティブラーニングとPBL

主眼であることが明記されています。最後の文では、「発見学習」以下で、より具体的な学習方法が示されており、特に、グループでの活動への取組みが強調されている点を見逃さないようにしましょう。この答申では、アクティブラーニングにおける、**他者との協調、協働**という側面が強調されていると思われます。これは、本答申に先立って出された学士課程答申において提案された**学士力**の定義を受けてのことでしょう。

表 1.1 は学士課程答申の学士力の定義です。いま、学生の皆さんが大学で修得してほしい力として、どんなものが求められているのかについて意識的になることは重要です。さらに、自身を振り返って、自身の力の全体的な姿を知ることは、今後の学習、さらには生活における方向性を決める際に必ず役に立ってきます。

また、アクティブラーニングと関連性が特に強いのは、この学士力の定義の 2.汎用的技能と 3.態度・志向性である点も指摘しておきたいと思います。

表 1.1 学士力の定義

1. 知識・理解
専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。 (1) 多文化・異文化に関する知識の理解 (2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能
知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能 (1) コミュニケーション・スキル：日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。 (2) 数量的スキル：自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。 (3) 情報リテラシー：ICT を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。 (4) 論理的思考力：情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。 (5) 問題解決力：問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。
3. 態度・志向性
(1) 自己管理能力：自らを律して行動できる。 (2) チームワーク、リーダーシップ：他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。 (3) 倫理観：自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。 (4) 市民としての社会的責任：社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。 (5) 生涯学習力：卒業後も自律・自立して学習できる。
4. 統合的な学習経験と創造的思考力
これまで獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用する能力

最後に、いままで述べたことを踏まえて、本書における私たちなりのアクティブラーニングの定義をつぎのようにまとめてみました。

Point アクティブラーニングの定義

- 教員主導の知識伝達を目的とした講義形式とは異なる、学生主導の能動的学習である。
- 学習者は読む、議論する、書く、発表するなどの活動を行う。
- 専門的知識の習得よりも、大学のみならず社会においても必要な汎用的能力の育成に主眼が置かれる。
- 学習者は活動の過程において、適時、その活動の成果物の提示を求められ、教員からのフィードバックを受けることができる。
- 学習の形態としては、グループ学習が頻繁に採用される。
- 学習課題は分析、統合、評価などの高次の思考が必要な問題発見・解決型の課題である。

1.1.2 アクティブラーニングがなぜ注目されるようになったか

アクティブラーニングは、アメリカの戦後の大学教育の在り方への危機意識と批判を背景に、その打開策として1980年代に誕生した経緯があります。日本でもやはり90年代になって、80年代のアメリカと類似した大学教育の危機意識が芽生えるようになり、アクティブラーニングが提唱されるようになります。

大学の危機打開の処方箋として考案され、開発されたアクティブラーニングは、その後、当初の予想を超えた広がりを見せることとなりますが、それは大学内の事情だけでは説明ができないと多くの研究者が指摘しています。つまり、21世紀に入って予想を超えた変化を見せる現代社会で必要とされるような新しい人材像や新しい能力が、しだいに具体的に描かれるようになると、大学はそのような人材や能力の育成を使命として請け負うことで社会的な役割を果たす時代になったのです。そのときに、この使命実現の具体的な教授・学習法としてアクティブラーニングへの期待が募ったわけです。

以下、これら二つの側面から、どうじてアクティブラーニングが注目されるようになったかを少し詳しく見ていくことにしましょう。

〔1〕 大学教育の危機

アメリカの大学においては、1960年代から大学の進学率が飛躍的に高まったことで、**大学の大量化**という現象が進行しました。例えば、1960年のアメリカにおける学生数は358万人だったものが、80年には1209万人にまで達しています。この大学の大量化によって、それまでの大学教育では想定していなかったような多様なバックグラウンドを持つ学生が大

索引

【あ行】		参考文献	66	ドメイン名	54
アクティブラーニング	1	思考	3	【な行】	
新たな未来を築くための大学		自然文検索	52	21世紀型スキル	8
教育の質的転換に向けて	1	下調べ	43	人間の価値の探求	3
一次資料	43	実社会での問題解決	34	人間的成長	3
イラスト	73	社会人基礎力	2, 8	能動的学修	2
webサイト	47	社会的信頼性	44, 49, 50, 53	【は行】	
円グラフ	79	集合図	76	発表練習	83
帯グラフ	78	主観的	59	パワーポイント	72
折れ線グラフ	78	授業評価アンケート制度	7	汎用的な態度	3
オンライン画像	80	主 題	61	汎用的な能力	3
【か行】		出 典	49, 79	非構造化	35
解決策	63, 69	受動的学習	2	非構造化問題	36
階層図	76	循環図	76	表	64
学士課程教育の構築に向けて	1	章	64	複雑性	35
学術用語	65	象限図	76	副 題	61
学士力	4	詳細検索	51, 53, 54	プレゼンテーション	
学生の多様化	6	小テスト	11	(プレゼン)	11, 81
箇条書き	75	小レポート	11	プロジェクト学習	11
画 像	64	書 籍	46, 67	プロセス図	76
学校から仕事・社会への		書 体	74	プロセス図	44
トランジション	8	序 論	61	文章化	38
過不足ないデータや		新聞記事	68	ページ数	66
資料の収集	34	図	64	棒グラフ	78
感想文	59	スキル	3	本 論	61
起・承・転・結	60	スライド	72	【ま行】	
キー・コンピテンシー	8	——の構成	73	マトリクス図	76
キーワード検索	43, 51, 53, 55, 56	スライド資料	72	メイリオ	74
技 能	3	成果物	3	目 次	44, 73
客観的	60	節	64	問題意識	61
キャプション	64	専門用語	65	問題解決学習	11
キャリアデザイン	8	相関図	76	問題を発見	3
行頭記号	75	相互教授法	11	【よ】	
議論状況	62	相互承認	21	読み原稿	82
グラフ	64	相互理解	21	読み練習	82
クリエイティブカオス	20	【た行】		【ら行】	
クリップアート	80	大学の大衆化	5	ライセンス	80
グローバル社会	8	タイトルスライド	73	リフレクション	19
掲載日時	49	対話の五つのプロセス	20	リメディアル教育	6
結 論	61	他者との協調、協働	4	ルーブリック	71
研究・調査方法	62	脱 字	65	レポート	59
検索エンジン	53	段階図	76	連想検索	55
検索システム	50	知識基盤社会	8	ロールプレイ	11
項	64	注	67	【英語】	
更新日時	49	中央教育審議会	1	CiNii Articles	34
誤 字	65	注 釈	65	Japan Knowledge	34
ゴシック体	74	著作権	66	OPAC	51
コメントシート	7, 11	定期刊行物	47	PBL	1
コンセンサス	16	ディスカッション	11	PDCA サイクル	18
【さ行】		データベース	52	SDGs	86
雑誌論文	68	テーマ案シート	38		
参考図書	47	適度な難問	35		
		デザインテンプレート	74		
		導入教育	6		
		図 書	46		

— 編著者・著者略歴 —

稲葉 竹俊 (いなば たけとし)

1982年 慶應義塾大学文学部フランス文学科卒業
1984年 パリ第三大学修士課程修了
1985年 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了
1988年 パリ第三大学博士課程 DEA 修了
1994年 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
1999年 東京工科大学助教授
2006年 東京工科大学教授
現在に至る

村上 康二郎 (むらかみ やすじろう)

1994年 慶應義塾大学法学部法律学科卒業
1998年 慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程修了
2002年 慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程単位取得満期退学
2002年 東京工科大学専任講師
2009年 博士(情報学)(情報セキュリティ大学院大学)
2010年 東京工科大学准教授
現在に至る

佐藤 宏樹 (さとう ひろき)

2006年 帝京大学文学部社会学科卒業
2008年 帝京大学大学院経済学研究科修士課程修了(経営学専攻)
2008年 教育系ベンチャー企業にて予備校運営に従事(～2011年)
2011年 公益法人にて産官学連携事業に従事(～2014年)
2013年 帝京大学短期大学ほかで非常勤講師
2017年 特定非営利活動法人こととふラボ代表理事
2018年 東京工科大学特任講師
現在に至る

鈴木 万希枝 (すずき まきえ)

1990年 慶應義塾大学文学部人間関係学科卒業
1992年 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了
1995年 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学
1999年 東京工科大学専任講師
2006年 東京工科大学助教授
2007年 東京工科大学准教授
現在に至る

神子島 健 (かごしま たけし)

2002年 東京大学教養学部総合社会科学科卒業
2006年 東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了(国際社会科学専攻)
2010年 東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程単位取得退学(国際社会科学専攻)
2010年 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻助教(～2014年)
2011年 博士(学術)(東京大学)
2014年 東京理科大学ほかで非常勤講師
2018年 東京工科大学准教授
現在に至る

改訂 プロジェクト学習で始めるアクティブラーニング入門

—— テーマ決定からプレゼンテーションまで ——

Getting Started in Project - Based Learning : Introduction to Active Learning

(Revised Edition)

© Inaba, Suzuki, Murakami, Kagoshima, Sato 2017, 2019

2017年2月23日 初版第1刷発行

★

2019年1月30日 初版第3刷発行

2019年12月20日 改訂版第1刷発行

検印省略

編著者	稲葉竹俊
著者	鈴木万希枝
	村上康二郎
	神子島健
	佐藤宏樹
発行者	株式会社 コロナ社
	代表者 牛来真也
印刷所	壮光舎印刷株式会社
製本所	株式会社 グリーン

112-0011 東京都文京区千石4-46-10

発行所 株式会社 コロナ社

CORONA PUBLISHING CO., LTD.

Tokyo Japan


振替00140-8-14844・電話(03)3941-3131(代)

ホームページ <https://www.coronasha.co.jp>

ISBN 978-4-339-07823-7 C3050 Printed in Japan

(松岡)



 <出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつと事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。購入者以外の第三者による本書の電子データ化及び電子書籍化は、いかなる場合も認めていません。落丁・乱丁はお取替えいたします。